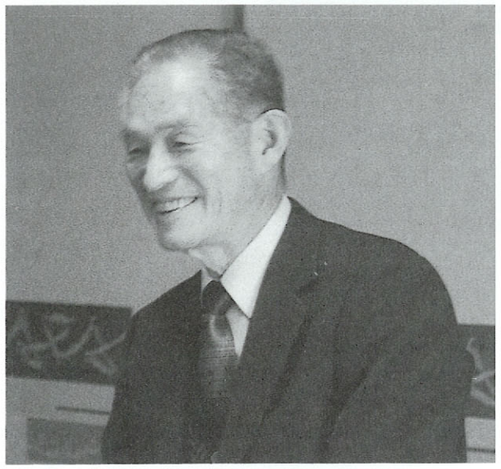
ぴーぷる

PEOPLE

障害を持つ子を社会へと巣立たせたい。

——障害児教育ひとすじ——



本渡市・尾上医院 尾上公敏（おのうえきみとし）さん

テキパキと作業を進めるかしの木学園の人たち

最高優功賞表彰式の模様

社会福祉法人「白い雲の会」
精神薄弱者授産施設（通所）「かしの木学園」

本渡市の町中にある昔ながらの小さな医院の医師、尾上公敏さん（七十三歳）に、このほど日本医師会から最高優功賞が贈られた。全国で一人というこの賞は、四十年もの間天草地域の障害児教育に力を注いできた功労を認められたもの。精神薄弱児とその父母らを支えてきた「赤ひげ先生」を訪ね、香が焚きしめられた心落ち着く部屋で話を伺った。

尾上さんが医院に通って来る障害児親子の相談にのり始めたのは昭和二十八年頃。

「当時、障害児は門外不出という感じでしたね。家族は『ウチにはそんな子いません』って顔をしてなかなか障害児を外へ連れ出そうとはしなかったんです」。そこで尾上さんが最初にしたことは、就学適齢期になっているのに学校に行けない、家でも何もしていない障害児を「月に一回でもここに連れて来てごらんなさい」と、とにかく外へ連れ出すことだった。「父母と医師の会」をつくり、お互い悩みを打ちあけ励ましあう機会も作った。「子供たちは初めはニコリともしてくれなかったんですが、そのうちに反応が見られるようになったんです」。家庭でできるその子に応じた機能回復訓練を気長に勧めながら、次に尾上さんがトライしたことは、キャンプだった。「キャンプファイヤーの神秘的な火を見た時の感動は、あの子たちにも通じるんじゃないか、と思いまして」。結果は予想通り。火が燃え始めるのを静かに待っている目の輝き、炎が大きく燃え上がった時の感動的な顔、それは障害児や健常児という枠を超えたものだった。しかし、健常児でも大変なキャンプへ障害児を連れていくことは並大抵のことではなかったろう。「看護婦さん、保母さん、…いろんな人たちに協力を頼みました」。資金繰り、機材運び、テント張りなどのために、商店街の人たちにも尾上さん自ら頭を下げて回った。

キャンプには思わぬハプニングも起こる。ある時、急な雷雨に襲われた。ところが、周りの心配をよそに、子供たちはそれぞれに荷物を持ってちゃんと退避ができた。

キャンプを楽しむ子どもたち

「意外な結果に何よりも感動したのは、私を含め指導者たちでした」と、尾上さんは頬を紅潮させて話す。その時その場にいた誰もが同じ気持ちだったのだろう。この頃のグループが現在の本渡市・天草郡精神薄弱者育成会「白い雲の会」の前身である。尾上さんが会長を務める「白い雲の会」は昭和四十五年に発足し、天草養護学校の設置などに力を注いできた。現在、会員は障害者のいない家庭の人も含め五百名にのぼる。

尾上さんがここまで障害児教育にうちこむきっかけは何だったのだろうか。

「たいそうな使命感はなかったのですが…」。とその偉業にあくまでひかえめな尾上さん。昭和二十三年シベリアから復員。戦後の新しい医学に触れたくて母校の九大医学部を訪ねた。障害児の養育施設など皆無だった当時、小児科教室で脳性マヒの子供たちを集め治療教育を行っている様子を目の当たりにする。「強い感動と共感を覚えました」。それが尾上さんの障害児教育に対する原体験だった。「今考えると、私の所に顔をだした子供たちをどうにかしてやりたい、その一念だったのでしょうね」。「私はシベリア時代、自分の目の前で栄養失調でバタバタと死んでいく兵士たちに何もしてやれなかった。その重荷をいまだに背負っているんです」。

一連の尾上さんの活動の流れから出て来たのが、養護学校を卒業した後の授産施設（※）の構想。「白い雲の会」の会員からの寄付金を基に、天草では初めてという通いの授産施設「かしの木学園」を昭和六十一年に設立した。

「障害者と家族を隔絶した関係にはしたくない。家庭で生活をし授産施設で作業訓練を受け、ゆくゆくは社会に出て行けるようにしてやりたい」。淡々と語る尾上さんには偉業を成し遂げてきたという気負いは全くない。袖返しの作業をする子供たちを見守るその目は温かさにあふれている。

※授産施設
雇用されることが困難な障害者に、必要な訓練を行ったり職業を与えたりして、自活への促進を図ることを目的とする施設。